



Japan Society of
Youth and Adolescent Psychology

Newsletter

第 66 号 2015 年 2 月 6 日
発行：日本青年心理学会事務局

■目次

<第 22 回大会委員長挨拶>

平石 賢二：日本青年心理学会第 22 回大会を無事に終えて

<特集：日本青年心理学会第 22 回大会>

眞鍋 一水：青年心理学会第 22 回大会での発表を通して

佐村志穂美：日本青年心理学会第 22 回大会に参加して

宮崎 郁江：研究委員会企画シンポジウム“大人から見た「青年」の様相”を通して
感じた青年像

<書評：私のおすすめ、この一冊>

関 峯一：日本青年心理学会(企画) 『新・青年心理学ハンドブック』

原田 新：田中康雄(監修) 藤森和美・辻恵介(編集) 『発達障害とキャリア支援』

<広報>

訃報

編集委員会からのお知らせ

事務局からのお知らせ

<第 22 回大会委員長挨拶>

日本青年心理学会第 22 回大会を無事に終えて

大会委員長 平石賢二(名古屋大学)

去る 11 月 1 日・2 日に名古屋大学教育学部で第 22 回大会を開催させて頂きました。お陰様で参加者数は目標としていました 100 名を超えることができました。ご参加頂いた皆様には大変感謝しております。有り難うございました。また、学会開催助成、協賛・広告掲載・出展、後援などの形で多くの団体の皆様にご支援を賜りました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。それから、この日程は学祭や入試関係のイベントなどが多く重なっていたと伺いました。ご都合で参加できなかった会員の皆様にはこの多忙な時期に開催日を設定しましたこととお詫び申し上げます。

今大会で重視したことは 2 点あります。1 点目は「おもてなしの心」を大切にしたいということでした。十分ではなかったかもしれませんが企画段階から大会当日まで準備委員会メンバーが大変誠実に取り組んでくれました。2 点目は、プログラムの企画テーマです。今大会では、招待講演と準備委員会企画シンポジウムを通して、「変貌する社会と青年の心理、その多様性」というテーマを打ち出したいと考えました。このテーマは恩師である久世敏雄先生が大切にしていた視点ですので、これが今大会の「名古屋大学らしさ」のひとつです。

大会委員長として会期中に最も嬉しく感動したのは、準備委員会企画シンポジウムに

予想以上に多くの方々が最後まで残って参加してくださったことです。また、懇親会が盛会で閉会になっても多くの方が名残惜しそうになかなか立ち去ろうとされなかったことです。苦勞した甲斐があったなと感じた瞬間でした。

日本青年心理学会は大変小さな学会ですが、大きな学会では得られない魅力があると大会を主催して再認識しました。この学会の今後益々の発展を心よりお祈り申し上げて、次期開催校である立教大学（大野久大会準備委員長）にバトンをお渡ししたいと思います。

＜特集＞ 日本青年心理学会第 22 回大会

昨年 11 月に名古屋大学にて日本青年心理学会第 22 回大会が開催されました。研究発表、シンポジウムなどにおいて、活発な議論がなされ、参加者各々が自身の研究を進める上での刺激を得る機会になったのではないのでしょうか。今回は、若手の参加者の方々から感想などをご寄稿いただきました。ご執筆いただきありがとうございます。

（担当：長峰伸治・三好昭子）

青年心理学会第 22 回大会での発表を通して

眞鍋一水（京都教育大学大学院）

今回私は修士論文の途中経過を発表させて頂きました。内容はアイデンティティ形成に関わる他者、「Identity agent」についてです。フロアにおられる多くの先生方に、特に根本的な点についてのご意見、ご指摘を多く頂きました。修士論文の行き詰まりも抱えており、大きな展開を与えて頂いたと感じています。やはり一人で研究を行っている、注意しても見過ごしてしまうような根本的な問題があります。よりよい研究となる為には必要不可欠なご意見、ご指摘を頂戴し、とても有り難く拝聴致しました。しかしながら、そのような根本的な点であるが故に、なかなか自分の答えが見つかりません。だからこそ、自ら考える事により、より一層よい研究につながるのだと思っています。そのために不可欠な問を与えて頂いたのであり、数々のご意見やご指摘を、自分が考え抜く機会とさせて頂きたいと考えております。心から感謝致します。

また、いくつもの興味深いシンポジウムを拝聴致しました。それぞれが自分にとっては新鮮であり、多くの刺激を与えて頂きました。さらに懇親会では名古屋大学のビール、日本酒、名古屋名物の数々と、名古屋観光の時間が無い中で、名古屋をしっかりと味わわせて頂きました。さらに味わいながら、全国の研究者の方々と交流を持たせて頂きました。素晴らしい学会と懇親会を準備・運営して頂いた事に、心から感謝申し上げます。

日本青年心理学会第 22 回大会に参加して

佐村志穂美（神戸大学大学院 人間発達環境学研究科）

この度、日本青年心理学会第 22 回大会において、『親から受けた非明示的な期待と他者の本心についての反すう・曲解傾向との関連』というテーマで発表させて頂きました。

私事ではございますが、学会発表を今まで経験したことがなかったため、ショートセッションの 45 分間は終始緊張に声を震わせておりました。それでも先生方から頂いたご質問・ご意見・ご助言の一つ一つを振り返る度に、自分自身の研究テーマに対して深い思考、広い視野をもつことが出来ていなかったことへの悔しさと、見たことのない道が

まだまだ先に続いていることへの好奇心の両方を抱いております。多くの先生方の多様なご意見を伺えると同時に、自分自身の研究に向き合う態度について改めて考えさせられ、身の引き締まる思いが致しました。この経験は、45分もの間、丁寧に自分自身の研究について検討して頂けるショートセッションならではの醍醐味であるように感じます。

自分自身の研究発表の場以外でも、大変有意義な時間を過ごさせて頂きました。シンポジウムでは、最新の知見や活発な議論を目の当たりにすることによって青年心理学研究の動きを肌で感じる事が出来ました。懇親会でも、名古屋の美味しい食べ物や飲み物に舌鼓を打ちながら憧れの先生方と真剣なお話や楽しいお話をさせて頂き、非常に楽しいひとときとなりました。

最後になりましたが、発表する機会を与えて下さった先生方、座長をして下さった伊藤美奈子先生、貴重なご意見・ご助言を下さった先生方、発表を聴いて下さった先生方、ニューズレター執筆の機会を与えて下さった先生方に御礼申し上げます。

研究委員会企画シンポジウム “大人から見た「青年」の様相”を通して感じた青年像

宮崎郁江（和光大学大学院 総合文化研究科）

今回の青年心理学会研究委員会企画シンポジウム “大人からみた「青年」の様相”というテーマは、今現在まさに「青年」期と呼ばれる立ち位置に立っているだろう私にとって、とても考えやすく、身近なテーマであったと思います。このテーマを聞いたとき、私自身がそもそも大人から「青年」と見られているのだろうか？という自分自身への問いがまず浮かびました。これはシンポジウム内でも述べられていた、「成人期」の曖昧さが理由の一つに挙げられるのではないかと考えています。

実際に成人式というものは存在していても、実際は年間行事に組み込まれているもの、カレンダーにあるもの程度の認識しかありません。現在、私自身は自分以外の“大人”と呼ばれる人たちから見たら「青年」期と区分される時期であるのではないかと思います。しかし、いまいち自分が青年である、という自覚が持てないままです。まだ院生という立場であり、社会に出て仕事をするようになれば意識も変わるのかもしれませんが、仕事をしているような人でも自分自身を「まだ青年である」というような回答が得られていることも、今回のシンポジウム内で知りました。それらを踏まえて、いかに青年期が曖昧で捉えにくい時期であるということがわかります。今回のシンポジウムを通して、青年期とはどのようなものなのか、自分はどのようなのか、改めて自分で考えてみる良いきっかけの1つになったと考えております。

<書評：私のおすすめ、この一冊>

『新・青年心理学ハンドブック』

日本青年心理学会(企画) 後藤宗理・二宮克美・高木秀明・大野久・白井利明・平石賢二・佐藤有耕・若松養亮(編) 福村出版(2014年刊)

関 峯一（本学会名誉会員）

複数巻の講座、事典そしてハンドブックを書評することは、いたって稀なことであろう。ここで敢えてハンドブックを書評の対象としたのは、本書が日本青年心理学会の企画によるものであり、後藤現理事長はじめ8名の理事が編集に当たられ、いわば学会の

総力の結集の成果だからである。

全体は5部構成で、Ⅰ部「青年心理学における概念ならびに方法論」、Ⅱ部「青年発達の諸側面」、Ⅲ部「青年発達の文脈的影響」、Ⅳ部「青年発達の障害と病理」までは執筆者は章節とトピックに分かれ、章節は8～14名、トピックは11～22名が分担し、1名Ⅰ章節または1トピックで、116名が単独執筆しそのすべてが日本青年心理学会員であり、全会員の4分の1を超えている。

なおⅤ部は趣を異にして「わが国の青年研究の実際」として、使用尺度の一覧と文献解題の2章で、すでにⅣ部までに執筆した各5名ずつの共著となっている。

冒頭の1部1章は、後藤理事長による「青年心理学研究の歴史的展開」と題した論述で、詳細な年表も掲載されている。ただその年表には1955年刊の青年心理学講座が記載されていない。あるいは青年心理懇話会の発足にも先立つ出版だということからか。この講座については触れたいこともあるが、省略する。

本書は700頁を超える大冊であるが、まず学会員諸氏が縦横に活用されることが期待される。Ⅰ部を中心に青年心理学の確固とした構築に向けての意欲も感じられるからである。そして発達の諸側面、発達の文脈、さらに発達の障害と病理には、非学会員の各層の関心も深いと思われる。

さて、この次にハンドブック、事典さらにはどんな形で、いつごろ出現するだろうか。想定ほどではない出版電子化の流れと共に興味が深い。

『発達障害とキャリア支援』

田中康雄（監修）・藤森和美・辻恵介（編） 金剛出版（2014年刊）

原田 新（徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部）

平成25年6月に障害者差別解消法が公布され、平成28年4月から国公立大学や高等専門学校等において、障害者への差別的扱いや合理的配慮の不提供の禁止が法的義務となり、私立大学等では障害者への差別的取扱いの禁止は法的義務、合理的配慮の不提供の禁止は努力義務となる。その為、今後大学においては、障がい学生の学生生活や修学の支援、キャリア支援等について、より一層力を入れることが求められている。特に近年、多様な障がい種別の中でも発達障がい学生（診断書有）の増加は顕著であり（独立行政法人日本学生支援機構、2014）、発達障がい学生への支援システムの整備は喫緊の課題となっている。

これまで幼児期や児童期の発達障がい児支援の書物は多数出版されているのに対し、思春期・青年期の発達障がい学生支援の書物は少なく、キャリア支援に関するものに限ればほぼ見受けられない。しかし近年、高等教育機関に発達障がい学生が急増している中、キャリア支援の現場でそのような学生への対応は一大問題となっており、支援の指針となるべく書物が望まれていた。本書はそのような社会情勢の中で出版された、待望の一冊といえる。

本書は第一部の「理解編」と第二部の「実践編」から成る。「理解編」では、発達障がい支援で著名な筆者らが、発達障がい全般の解説、青年、成人の発達障がいの障がい特性や支援方法、就労を目指す際に利用できる制度や社会資源等、発達障がい学生のキャリア支援を考える上で必要な知識を解説している。「実践編」では、就労支援の現場で活躍中の筆者らが、発達障がい者に対する様々な就労支援の取り組み内容や事例に関する報告を行っている。今後、障がい学生へのキャリア支援は、キャリア支援の専門家のみ

ならず、高等教育機関で勤務する教職員全体の問題となっていくであろう。本書は発達障がい学生のキャリア支援の問題に取り組む上で、道標となり得る一冊である。

<広報>

訃報

ニューズレター編集委員長 杉村 和美

本学会名誉会員の秋葉英則先生が2014年11月9日にご逝去されました（享年73歳）。秋葉先生の学会への多大なご貢献に感謝申し上げ、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。なお機関誌『青年心理学研究』に秋葉先生の略歴や業績を含めた追悼記が掲載される予定です。

編集委員会からのお知らせ

「青年心理学研究」編集委員長 高木 秀明

26巻1号を刊行した際に同封した書面でお知らせしましたが、編集委員会では、紙媒体を用いた論文査読から電子ファイルを用いた論文査読へと徐々に移行を進めております。電子ファイルを用いた査読依頼を行うためには、著者から送付していただく投稿原稿の一式を、従来のプリントアウトした紙媒体での提出だけでなく、電子ファイルでも提出していただく必要があります。

これらの移行に伴い、投稿規程が一部改正されております。投稿規程は、最新の学会誌第26巻第2号、あるいは学会ホームページでご覧下さい。

変更点のポイントは、①紙に印刷した投稿原稿一式の郵送は1部でよいこと、②チェックリストに自筆署名が必要になり郵送で提出すること、③新たに電子ファイルでの投稿原稿一式の提出も必要となることです。

どうぞよろしくお願い致します。

事務局からのお知らせ

I. 会員ホームページのリンク

日本青年心理学会ホームページ（<http://www.gakkai.ac/jsyap/>）の「学会の紹介」タブの最後に、「会員のホームページ」の欄があります。掲載をご希望の方は、事務局（seinenshinri@gmail.com）までメールで連絡をください。

（記入例）山田花子会員（〇〇大学）のホームページ
青年期・進路指導の紹介、論文紹介など

II. 会員異動

2014年9月5日以降、以下7名の方が入会されました（2015年2月6日までに会費納入が確認された方です）。なお、非公開を希望された項目については掲載しておりません。

III. 送付先不明の方のお名前

以下の方のご住所が不明になっております。ご存じの方はその方にご連絡いただき、転居先を事務局までお知らせくださるようにお伝えください。またその方の了解があれば、これを読んでおられる方が直接事務局にお知らせいただいてもかまいません。

日本青年心理学会事務局
The Japan Society of Youth and Adolescent Psychology
〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町
京都大学高等教育研究開発推進センター 溝上研究室内
TEL : 075-753-3047
E-mail : seinenshinri@gmail.com
Homepage : <http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsyap/>
振替口座 : 00940-6-273417
口座名称 : 日本青年心理学会

お問合せはできるだけ E-mail でお願い致します。